

2022年2月21日

令和4年度(2022年実施)試験「世界史B」について

【1. はじめに】

今年度(令和4年度)の世界史の大学入学共通テスト(以下、共通テスト)について、令和3年度の共通テスト(第1日程)および令和2年度のセンター試験(本試験)と比較できるように、基本情報を次の表にまとめた。

◎直近2回の共通テストと令和2年度センター試験に関する比較表

	令和2年度 センター試験	令和3年度 共通テスト	令和4年度 共通テスト
大問数	4題	5題	5題
小問数	36問	34問	34問
ページ数	24ページ	30ページ	28ページ
図版	6個	17個	13個
平均点※ ¹	62.97点	63.49点	65.83点

※1. 平均点は大学入試センターホームページより引用

今年度の共通テストは、昨年度に引き続き、大問数5題、小問数34問であった。ページ数は、昨年度の30ページから28ページと若干減っているが、一昨年のセンター試験では24ページであったことを考えると、分量は昨年度と同程度といえる。

図版は、昨年度の17個から13個と減っているが、今年度は、昨年度のように一つの設問で複数の史資料が使われる問題が減っているためと考えられる。その点を考慮すれば、大きな変化はなかったといえる。

難易度については、細かな知識を問わず、高等学校の学習範囲内の重要事項を中心に問うており、平均点が例年と大差なかったことからみても、昨年度と同程度であったといっていよう。

また、出題形式の面をみても、昨年度から大きく変わったところはなかった。細かくみていけば、誤っているものを選択させる問題がなくなったことや、地図問題が1問から3問に増えたこと、年代整序問題がなくなったことなど多少の違いはあったが、世界史について大枠の作成方針は固まってきたと思われる。

内容面では、昨年度と同様に、世界史の知識だけではなく、思考力・判断力などの能力も評価できるように工夫が凝らされた問題が多く見られた。一方で、単純な読み取りや簡単な知識の暗記で解答が絞れる問題もいくつか見られた。次のポイント解説では、具体的な問題を例にとりながら、詳しくみていきたい。

【2. ポイント解説】

○読解と知識の要素が連動した問題

・第1問 文章B 問4

問4は、リード文(文章B)中の2つの空欄に当てはまる選択肢の組み合わせとして正しいものを選ばせる内容である。リード文では、ハサン=ブン=イーサーという人物の伝記記事(受験生にとっては初見の資料)が引用されたあとに、そのまとめとして、「上の資料から、ハサン=ブン=イーサーが **イ** として活躍し、特に **ウ** の分野で評価されたことが読み取れる。」という文章が続いた。空欄イには、「ウラマー」と「スーフイー」の語句が、空欄ウには、ウラマーとスーフイーについての説明文がそれぞれ選択肢として提示された。

ウラマーについて理解している受験生であれば難なく解答できたと思われるが、単なる知識問題ではなく、ハサン=ブン=イーサーがどのような人物かを初見の記事から読み取った上で、世界史の知識を活用して解答を導く必要がある。知識と読解を連動させなければ解答できない構成になっているという点で、従来のセンター試験にはない問い方の問題であったといえる。また、難易度も世界史の重要事項の理解を問うものであり、適切なレベルといえるだろう。

○単純な読み取りと簡単な知識で解ける問題

・第3問 文章C 問7

リード文(文章C)として、オセアニアの先住民に関する授業での会話文が提示される。問7は、授業を受けて生徒2名がまとめたメモが提示され、そのメモの正誤として正しい選択肢を選ばせるという内容である。メモの内容は、会話文の読解と「オーストラリアとニュージーランドはイギリスの植民地であった」という世界史の知識によって正誤判定することができた。読解と知識の要素がうまく連動しておらず、それぞれの要素に基づく判断が別個に要求される問い方になっている。求められる読解は、単に会話の文章が読めているかを問う簡単なレベルのものであった。また、要求される知識レベルも、科目専門の知識というよりも、一般教養に近いレベルの知識と思われる非常に簡単なものであった。読解と知識ともに、もう少し高度なレベルの内容を出題してもよいのではないだろうか。

今年度は、こうした単純な読み取りだけで選択肢を絞れる問題が昨年度に比べて若干少なくなったと思われる。大学入試センターもできる限り、単純な読み取りで解答を絞れる問題にならないように注意して作成を進めているのではないかと推測される。今後もこうした傾向が続くのか注視していきたい。

○新しい視点の問題

・第4問 文章B 問6

先生と生徒の会話文(文章B)を読んだ上で解答させる問題である。会話文で先生は、ド

イツ騎士団を撃退した人物を称賛する映画の上映が、ソ連で 1939 年から 1941 年まで禁止されたことを述べている。問 6 は、その映画の上映が禁止された要因に関して、推測される仮説として最も適切な選択肢文を選ばせるというものである。

受験生からすれば、映画が禁止されたことは初見の事実であるが、世界史の教科書の知識を活用しながら、当時の政権が映画の上映を禁止した背景を考察し解答を導くという問題になっており、大変興味深い出題であると感じた。

しかし、その一方で、各選択肢の正誤判定は、結局のところ、用語の知識だけで対応可能であった。特に選択肢③や④は、キーワードの「コメコン」や「十月革命」が会話文にある年代から大きく離れた用語であることから、容易に誤りと判断できてしまう。面白い試みではあるものの、仮説について、理由ではなく、歴史用語の正誤で判断できてしまう点を考えると、やはり客観式テストで思考力・判断力などの能力を問うことの難しさを感じさせる設問でもあった。

【3. まとめ】

世界史の共通テストは、全体的に見れば、従来のセンター試験のような知識偏重の問い方にならず、思考力・判断力などの考える力もあわせて確認できるように工夫が凝らされている。分量についても、世界史をしっかりと学習した受験生であれば試験時間内に解答可能であり、適切なものとする。また、難易度についても、細かな内容を問うのではなく、重要事項の理解を問うように心掛けて作成されており、適切であるといえる。思考力や判断力などの能力も測りつつ、世界史の標準的な学力を問うという実施目的はおおむね達成されているのではないかと考える。

一方で、なかには実質的に知識の暗記のみで対応可能な問題もあれば、単純な読み取りで解答が絞れてしまう問題もあった。思考力・判断力などの能力を重視しつつ、世界史の学力を測る問題を作成することは大変難しいことではあるが、今後、さらに世界史の学力試験でありながら、より高度に思考力や判断力などの能力を問うことができるような問題が作成されることを期待したい。

○参考資料

- ・「令和 4 年度大学入学共通テスト実施結果の概要」大学入試センターホームページ
- ・「令和 3 年度大学入学共通テスト実施結果の概要」大学入試センターホームページ
- ・「令和 2 年度大学入試センター試験実施結果の概要」大学入試センターホームページ